



ハナカイドウ

145 編は端書きに、(アルファベットによる詩) とあり、**賛美。ダビデの詩。**となっています。詩篇のうち 73 篇が **ダビデの詩** とされていますが、ダビデの詩としては、最後の詩編となります。

主の栄光、力を余すところなく数え上げ、賛美を尽くしたいという願いのためでしょうか、**アルファベット**順に 22 文字による言葉を繋いで歌っていることと思います。1 節ずつ、単刀直入に、信仰の真髓を吐露しています。ただ、145 編は 21 節しかなく、**ヌン(口)**が欠けているということです。

119 編も (アルファベットによる詩) ですが、22 文字のアルファベットごとに、8 節からなる 1 連が 22 連となり、全体が 176 節の長大な詩編です。少し見比べてみると、**ダビデの詩** の各節は、119 編の各連と共通の言葉が用いられ、イメージが膨らみ、そこから、派生して、さらに大きく、力強く信仰が述べられていると感じます。例えば、1, 2, 3 節では 119 編が、守り進むべき道として「律法、裁き」を第一に賛美していますが、145 編は「王なる主の御名と御業」を第一に賛美しています。4~7 節では、119 編が信仰の弱さ、忍耐の姿勢を歌っているのに対し、149 編は積極的な姿勢が歌われています。続いて、主の姿については「恵み、憐れみ、慈悲、忍耐」を上げて賛美しています。

145 編で主の姿として **あなたの主権の栄光** という言葉を用いている点が特筆すべき点です。「主権」とは統治の最高、独立、絶対の権力を示す言葉です。旧約聖書ではダニエル書、ミカ書に出ているだけですが、145 編では繰り返して 4 回もこの言葉が記されているのです。王であるダビデが、**あなたの主権の栄光を告げ／力強い御業について語りますように。(11)、その力強い御業と栄光を／主権の輝きを、人の子らに示しますように。(12)、あなたの主権はとこしえの主権／あなたの統治は代々に。(13)** と主を賛美しているのです。これだけは譲れないと主張しています。

14 節からは再び主の姿として **主は倒れようとする人／うずくまっている人を起こして下さいます。(14)、ときに応じて食べ物をご下さいます。(15)、すべてに向かって御手を開き／望みを満足させて下さいます(16)、と、弱者、飢餓者、貧者など、底辺に生きざるを得ない人々の救い主として賛美しています。その中でも主を呼ぶ人すべてに近くいまし／まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし(18)** との告白は、信仰者と共にある臨在の主の姿を賛美しています。悩みやためらいのある 119 編の詩人と比べ、最後に **わたしの口は主を賛美します。すべて肉なるものは／世々限りなく聖なる御名をたたえます。(21)** との締めくくりは、ダビデの信仰の歩みから生まれた確信を強く感じさせられます。

『讚美歌 21』は 167, 168「天にいます神よ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2011-10-08> を上げています。穏やかな曲想の 17 世紀のスコットランド詩編歌 <https://www.youtube.com/watch?v=TV2-2o75iPc> に合わせて、『讚美歌 21』の改訂委員として働かれた岸本羊一牧師(当時紅葉坂教会)が、1990 年に 145 編を構成し直し、歌詞にされました。ジュネーブ詩編歌はルネッサンス・ギターとビオラ・ダ・ガンバの作品です。 <https://www.youtube.com/watch?v=Bk83IEuFvgw&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=145>